

異文化間教育学会 2017 年度第 1 回若手研究交流会 開催報告

若手交流委員会（新見・徳永・横田）

1. 概要

開催日：2017 年 10 月 1 日（日）12:00～17:30

開催場所：明治大学中野キャンパス 6 階 プレゼンスペース

12:00～13:30 「エスノグラフィーを学ぶ：研究出版に向けてのアドバイス」

講師：柴山真琴会員（大妻女子大学）

参加者：26 名

14:00～16:00 「『異文化間教育学大系』（2・4 巻）の筆者を囲んで」

パネリスト：

2 巻編者 加賀美常美代会員（お茶の水女子大学）・徳井厚子会員（信州大学）

4 巻編者 佐藤郡衛会員（目白大学）・横田雅弘会員（明治大学）・坪井健会員（駒澤大学）

参加者：22 名

16:00～17:30 懇親会

参加者：19 名

2. 内容

2. 1 「エスノグラフィーを学ぶ：研究出版に向けてのアドバイス」

大妻女子大学の柴山真琴会員に、エスノグラフィーを用いた論文を執筆している大学院生や若手研究者を対象に、研究するときに押さえておくべき点や、これを字数制限のある論文にまとめるときの工夫、そして出版に当たって重要になる研究倫理等についてご講演をいただき、その後、参加者とインタラクティブなディスカッションや質疑応答を行った。

まず、ご講演では、柴山先生とエスノグラフィーとの関わりについてお話しいただいた後、用語の使い分けとして、「フィールドワーク」「質的研究法」「方法としてのエスノグラフィー」の関係性、エスノグラフィーの手法として「参与観察」や「インタビュー」などが含まれるという位置付けについて説明があった。さらに、エスノグラフィー研究における要点として、研究の一貫性、自

分が依拠する認識論的立場の明確化、理論的枠組みの構成、研究対象と研究目標・設問に適した方法の選択を行うことが重要であるということが述べられた。そして、産物としてのエスノグラフィーに関わる問題としては、4つのエスノグラフィーのカテゴリー（古典的・科学的・批判的・実験的）と、「エスノグラフィーを書くこと」をめぐる議論を押さえておくことが大事であることが語られた。そして、学術論文として書く際のバランスや、成果の公開に際しての配慮、フィールドへのフィードバックの重要性についてもお話しいただいた。

質疑応答の中では、用語の使い分けに関連して、「質的研究法」と「エスノグラフィー」の違いについての質問があった。柴山会員は、「エスノグラフィー」では、より研究対象を丁寧に捉えるため、「質的研究法」の中の「インタビュー」や「参与観察」などといった2つ以上のデータ収集方法を組み合わせることが、「エスノグラフィー」の特徴であるということが説明された。さらに、参加者から研究者自身が調査者でありながら、フィールドにおける当事者でもあるというダブルロールを果たしている際は、執筆上どのような注意が必要かという質問があった。これに対して、柴山会員は、自分自身が調査者または当事者のどちらの立場寄りであるのか自覚することの重要性と、自分自身がダブルロールを果たしていることを執筆時にも明確にするとともに、ダブルロールをしていることによる影響がどのようなものなのかについても検討し、表明することが重要であると述べた。

2. 2 『異文化間教育学大系』（2・4巻）の筆者を囲んで」

学会企画として2016年に刊行した『異文化間教育学大系』の編者をお招きし、それぞれの視点から本書に関するお話をいただいた後、パネルディスカッション形式で議論を深めた。今回は、第2巻（家族、コミュニティ、学校（小・中・高校・大学等）、国際理解・異文化理解、メディア、越境など、異文化間教育が展開する「場」、あるいは異文化間教育が対象にしてきた「場」）に関わる研究）と、第4巻（方法論、障がい者・ヒューマンライブラリー・ジェンダーなどの「文化」概念の拡張による新しい対象、学校教育の現代的課題、実践と研究の関連、方法論や新たな研究動向に関する研究）の編者がパネリストを務めた。

まず、佐藤郡衛会員から、全4巻の編者としての立場から、本書を刊行することになった経緯と、4巻全体の構成についての概要が語られた。まず、本書の刊行の経緯として、2012年に大系化の刊行案が示された後、2013年の大会時

に学会プロジェクトとして始動し、2016年5月に全4巻が同時刊行されたことが語られ、また、刊行にあたる3つのねらいは、異文化間教育の研究成果の現段階での到達点を示すこと、異文化間教育が研究の今後の視点や方向性を示すこと、異文化間教育学の大系化を図ることであるとの説明があった。さらに、本書の構成にあたり、「異文化間教育」を網羅するカテゴリ分けは困難であったが、第1巻と第2巻は対象別、第3巻は領域別、第4巻は方法論・新しい研究という形で整理されたことが報告された。さらに、本書の特徴として、先行研究が整理されているため次に行う研究の出発点になるという点、また、「異文化間教育学」がどういう学問であるのかという全体像が把握できるという点が強調された。次に2巻の編集者である加賀美常美代会員と、徳井厚子会員から、第2巻の編集に当たってのご経験が語られた。次に、佐藤郡衛会員、坪井健会員、横田雅弘会員から第4巻で収録された内容にあたっての編集の方針や課題などが語られた。

質疑応答では、第2巻で用いられている「場」の意味に関連した質問が幾つか参加者から上がった。加賀美会員と徳井会員によると、2巻の「場」とは「環境」のことを指すという解釈であること、また、Bronfenbrennerの人間発達の生態学に基づいた、マイクロシステム、メゾシステム、エクソシステム、マクロシステムという個と環境の相互作用という概念を参考にして、「場」を捉えていると説明があった。会場からのコメントとして、ハワイで日本語教育を行っているという参加者によると、日本人は異なる「場」にいるときに異なった「自己」があるという認識を理解できるが、アメリカ人はどのような「場」に行っても一貫した「自己」であり、「場」によって「自己」が変化するという感覚を理解しづらいという傾向が見られるとのことであった。会場の柴山会員から「場」と「自己」の関係性については、「相互独立的自己観」と「相互協調的自己観」という概念によって議論されているというご指摘があった。さらに、また、異文化間教育学の今後に関して議論が行われ、あえて大系化・組織化せず、学会がもつ流動性・多様性・開放性を大切にすべきではないかなどの意見が出た。

3. 懇親会

2つのイベント終了後、同じ会場にて懇親会が行われた。「『異文化間教育学大系』（2・4巻）の筆者を囲んで」に参加した方々の殆どが懇親会にも引き続

き参加した。懇親会は立食形式で行われ、飲み物と食べ物を片手に、ベテランと若手の会員が世代を超えて交流し、語り合うよい機会となった。

4. 今後に向けて

今回の研究法に関するセミナーについては、当初、大学院生や若手研究者向けに企画をしたものの、実際は必ずしも大学院生や若手の研究者だけではなく、ベテランの研究者の方々にも多数ご参加いただいた。若手交流委員会の企画は、若手だけに特化した交流会というよりも、若手とベテランの世代を超えた交流の場として機能するという可能性が示されたように思うが、引き続き、当初から対象としていた大学院生や若手研究者を惹きつける魅力のある企画を行うとともに、ベテランの方々にも多くご参加いただき、若手とベテランの交流の場になるよう意識して企画を準備したい。